かくすけづつみ

角助堤のカッパ

本町特産の「じゅんさい」発祥の地である角助堤に
昔カッパが棲んでいたと云う、次のような昔話が伝えられています。

昔なあ、角助堤にカッパがいだど。じゅんさい採る人の舟さいたずらしたり、汗洗う馬の足引っぱったり、水浴びする子どもをおぼれさせだりして、困らせでいだもんだど。

ある時、角助は、なんとがしてカッパをつかまえてこらしめてやるべど思ったど。考えで考えで、やっといい知恵浮かんだど。岸辺のあしの中さ隠れで、わらしが水遊びでもしてるように音たでで、カッパの来るのをじっと待ったったど。

そしたら、案の定、カッパが水の上さまなぐ出して、キョロキョロとまわりをうかがってあったど。角助はしめたと思って、またきわの方さ近づきながら、しきりに水音をたでだど。

カッパはそれさつられで、頭を水の上さあげて、あしの向こう側を見であったが、だんだん角助につられで、きわの浅いどごさ寄って来たど。角助は、しっかりカッパをそばさ引ぎつけで、持っていた棒でカッパの皿をピシャリとたでいだど。なんぼびっくりしたべが。ただがれだカッパは、へなへなときわさのびでしまったど。突然皿をたでがれだもんで、カッパは皿の中の水がなぐなり、赤子のように力なぐなってしまったど。そこで、角助は、荒縄でぐるぐると縛ってしまったど。

「やい、カッパ、おめは随分悪いごどばりしたな。これがら村さ連れでいって、こらしめてやる。覚悟しろ。」

といってカッパを引っ張ったど。すたっけ、カッパは土さ頭つけで言ったど。

「悪がった。おれ、本当に悪がった。これがらは二度ど悪いごとしねためにに、なんとがごめんしてけれ。おれはいたずらしたども、おぼれ死にさせるようたごどはしてね。たんだおれ、一人ぼっちで、遊ぶ友達もいねがったために寂しがったんだ。なんとがごめんしてけれ。」

と涙流してあやまったど。

なんともあわれなカッパの姿に、角助もかわいそうになってきたど。

「おめは、友達ほしいっていいながら、わらしどご水の中さ引っ張ったりするがら、かえってだれも沼さ来ねぐなったんだ。一人も来ねぐなれば、これがらおめは、本当に一人ぼっちだったど。それでもいったが。」

「んか、友達ほしい。んだども、みんなおれどご見れば逃げで行ってしまう。どしたらいいんだ。おれ、本当に友達になりでったって。」

「どしたらいいが考えでみれ。おめがどうなれば好かれるが。」

カッパは一生けん命考えだど。そして、

「よぐ分がった。これがらは悪いごどしねだげでなぐ、もし、沼さ遊びに来た人で、おぼれそうな人いれば必ず助けでやる。今までのごど、本当にごめんしてけれ。」

「本当によぐ分がったな。」

「分がった。決してうそつがね。」

カッパは角助さ約束したど。

そこで、情け深い角助は、縄解いでカッパどご沼さ放してやったど。

それがらは、角助堤でだれも水さおぼれる人いねぐなったど。